東洋文庫内岩崎文庫蔵『論語集注』影印（一部）

中野直樹

一、はじめに

東洋文庫内岩崎文庫に『論語集注』上・下計二冊が蔵されている。本書は、琉球大学附属図書館蔵『論語集注』の同版の資料として、榮野川・高津（1996）で紹介されたもので[1]、数少ない琉球版資料として貴重なものである。また、本書には訓点が加点されており、これの高い言語的価値については中野（2022）で論じたところである。本稿では、この資料の一部を影印として書誌情報を付加したうえで紹介したい。

二、書誌情報

以下、本書の書誌を示す[2]。

〔装訂〕袋綴じ
〔冊数〕二冊（上・下各一冊）
〔綴じ目〕四ツ目、綴じ糸は紫色
〔寸法〕〔表紙〕上巻 26.3cm×18.7cm、下巻 26.3cm×18.6cm
〔匡郭〕上巻 21.1cm×16.1-16.4cm、下巻 21.2cm×16.3-16.4cm
＊匡郭はいずれも単辺。
＊下巻の巻六前半のみ匡郭の縦が 20.8cm となっている。
〔料紙〕楮紙
〔表紙〕原表紙、焦茶色、文様無し

〔外題〕左上打付書き、「四書集註　上　論語」「四書集註　下　論語」いずれも墨筆。上冊のみ表紙中央上部に朱筆で「論語」と大書あり。
〔内題〕論語
〔柱題〕論語
〔刊写年次〕江戸時代後期か。
〔残存〕論語のみ現存。表紙に「共八本」とあるので元は揃いか。
〔保存〕良
〔容器〕一帙
〔序跋〕無し
〔本文紙数〕上冊八十八丁　下冊八十丁
＊上下冊とも遊紙無し。
〔見返し〕下冊表紙見返しに「寅二月朔日御讀取」とあり。
【図1】
〔行数〕九行十七字。
〔書入〕片仮名（墨筆のみ。稿末影印参照）
〔蔵書印〕「雲邨文庫」（上冊最終丁ウ左下・下冊最終丁ウ左下。いずれも朱　）【図2】
「宜野湾御殿」（上冊一丁オ右下・下冊一丁オ右中。いずれも朱　）【図3】
＊「雲邨文庫」は和田維四郎氏[3]、「宜野湾御殿」は尚寅[4]のものである。

〔その他〕
・刊記、奥書なし。
・琉球大学附属図書館蔵本と同版だが、刷の状態からこちらの方が初印に近いものと判断する。

（2021年11月4日、2021年12月17日調査）

【図1】下冊表紙見返し書き込み

【図2】和田維四郎蔵書印

【図3】尚寅蔵書印

注目されるのは、「宜野湾御殿」の蔵書印で、これは榮野川・高津（1996）が指摘するように、尚泰の次男である尚寅のものである。本書には奥書等が無いことから、誰が本書に加点したのか明確には分からないが、中野（2022）で下冊見返しの「寅二月朔日御讀取」という書き込みと蔵書印から、本書の訓点加点者が尚寅であった可能性に言及した。

本書と同じ帙にメモが一枚挟まれており、榮野川・高津（1996）はこのメモが樋口慶千代氏[5]のものとしているが、メモ自体に署名は無く、根拠は分からない。次にそのメモの全文を示す（行送り等本文ママ）。

文学士武藤長平氏の「琉球訪書志」歴史地理第廿九巻第二号に
琉球板
四書集註　嘉永二年　とあり又
琉球板の「四書集註」及び「四書俚諺鈔」の板木が尚侯爵邸にあり「童子撫
談」の版木が浦添家にあるに関らず其等の書籍が一向残つて居な
いのを遺憾に思ふ
など有之（マヽ）い本書は琉球の「宜野湾御殿」の押印有之多分琉球版ならんと
存候

これが樋口氏のメモであったとするならば、氏が東洋文庫研究員となった大正十三年（1924）頃には、本書が琉球版の資料とみることができるであろうことがメモという形ではあるが指摘されていたこととなる。

参考文献

上田正昭・西澤潤一・平山郁夫・三浦朱門監修（2001）『日本人名大辞典』講談社
榮野川敦・高津孝（1996）「琉球板『論語集注』について」『汲古』（30）汲古書院
中野直樹（2022）「琉球における漢文訓読の実態―琉球版『論語集注』による―」『訓点語と訓点資料』（149）訓点語学

会
真栄平房敬（1983）「尚寅」『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社
東洋文庫ホームページ http/www.toyo-bunkoor.jp/library3/shozou/wadat.html（最終閲覧日 2022/07/31）

使用文献

（公財）東洋文庫蔵『論語集注』（岩崎文庫、三－C－31）

注

1　榮野川・高津（1996）では、本書の存在を斯道文庫の高橋智氏より知らされたとある。

2　中野（2022）にも本書についての簡単な書誌情報がある。

3　和田維四郎　わだつなしろう 1856－1920　鉱物学者。福井県。日本鉱物学の先覚者で、地質調査の基礎を確立。わが国で最も完全な鉱物標本を作る。著書に『日本鉱物誌』『日本鉱物資料』等。また、古書の蒐集にも努め、図録『訪書余録』を編纂。号は雲村。岩崎久弥の和古書蒐集における顧問的存在。「雲村文庫」は岩崎を経て東洋文庫に収む。（東洋文庫HPによる）

4　尚寅　1866.10.16 ～ 1905.2.17（慶應2～明治38）公同会運動の推進者の一人。最後の琉球王である尚泰の二男、宜野湾朝広。童名は思樽金。母は王妃章氏佐敷按司加那志思戸金。1875年（明治8）宜野湾間切を賜り、宜野湾御殿を創立。79年14歳のとき廃藩置県にあい、父王に従って上京。（中略）漢籍に精通し、音楽を能くし、書道にも堪能な王子として知られる。自筆の書と愛用の筆硯は首里城内の郷土博物館に展示されていた（「尚寅」（真栄平房敬執筆）『沖縄大百科事典』による）。

5　樋口慶千代　ひぐちよしちよ 1879―1956　大正―昭和時代の国文学者。明治12年9月1日生まれ。郷里広島県の福山中学教諭、東京帝大図書館司書をへて大正13年東洋文庫研究室員となる。のち立正大講師、日大教授。文部省図書館職員養成所で和書を講じた。昭和31年6月8日死去。76歳。東京帝大第一教育養成所卒。著作に「近松語彙」「近松時代」など。（『日本人名大辞典』による）

付記

資料閲覧・掲載に際して東洋文庫当局より御許可を賜りました。記して感謝申し上げます。本稿は、JSPS 科研費「琉

球における漢文訓読に関する研究」（20K13058）の助成を受けています。

（なかの・なおき　本学教員）

影印（一部）

今回は事情により全体の影印の掲載はできないので、本書の本文のうち訓点加点箇所のみを掲載する。掲載する箇所は上冊「学而」冒頭から三丁分である。

論語卷之一

朱熹集註

學而第一

此爲書之首篇故所記多務本之意乃入道之門積德之基學者之先務也凡十六章

子曰學而時習之不亦說乎說悅同○學之爲言效也人性皆善而覺有先後後覺者必效先覺之所爲乃可以明善而復其初也習鳥數飛也學之不已如鳥數飛也說喜意也既學而又時時習之則所學者熟而中心喜說其進自不能已矣程子曰習重習也時復思繹浹洽於中矣澤則說也又曰學者將以行之也時習之則所學者在我故說謝氏曰時習者無時而不習坐如尸坐時習也立如齊立時習也

有朋自遠方來不亦樂乎樂音洛○朋同類也自遠方來則近者可

知程子曰以善及人而信從者衆故可樂又曰說在心樂主發散在外　人不知而不慍不亦君子乎　慍紆問反○慍含怒意君子成德之名尹氏曰學在己知不知在人何慍之有程子曰雖樂於及人不見是而無悶乃所謂君子愚謂及人而樂者順而易不知而不慍者逆而難故惟成德者能之然德之所以成亦曰學之正習之熟說之深而不已焉耳○程子曰○有樂由說而後得非樂不足以語君子　○有子曰其爲人也孝弟而好犯上者鮮矣不好犯上而好作亂者未之有也　弟好皆去聲鮮上聲下同○有子孔子弟子名若善事父母爲孝善事兄長爲弟犯上謂干犯在上之人鮮少也作亂則爲悖逆爭鬬之事矣此言人能孝弟則其心和順少好犯上必不好作亂也　君子

復反反

務本本立而道生孝弟也者其爲仁之本與　與平聲○務專力也本猶根也仁者愛之理心之德也爲仁猶曰行仁與者疑詞謙退不敢質言也言君子凡事專用力於根本根本既立則其道自生若上文所謂孝弟乃是爲仁之本學者務此則仁道自此而生也○程子曰孝弟順德也故不好犯上豈復有逆理亂常之事德有本本立則其道充大孝弟行於家而後仁愛及於物所謂親親而仁民也故爲仁以孝弟爲本論性則以仁爲孝弟之本或問孝弟爲仁之本此是由孝弟可以至仁否曰非也謂行仁自孝弟始孝弟是仁之一事謂之行仁之本則可謂是仁之本則不可蓋仁是性也孝弟是用也性中只有箇仁義禮智四者而已曷嘗有孝弟來然仁主於愛愛莫大於愛親故曰孝弟也者其爲仁之本與　○子曰巧言令色

鮮矣仁巧好令善也好其言善其色致飾於外務以悅人則人欲肆而本心之德亡矣聖人詞不迫切專言鮮則絕無可知學者所當深戒也○程子曰知巧言令色之非仁則知仁矣

○曾子曰吾日三省吾身爲人謀而不忠乎與朋友交而不信乎傳不習乎省悉井反爲去聲傳平聲○曾子孔子弟子名參字子輿盡己之謂忠以實之謂信傳謂受之於師習謂熟之於己曾子以此三者日省其身有則改之無則加勉其自治誠切如此可謂得爲學之本矣而三者之序則又以忠信爲傳習之本也○尹氏曰曾子守約故動必求諸身謝氏曰諸子之學皆出於聖人其後愈遠而愈失其眞獨曾子之學專用心於內故傳之無弊觀於子思孟子可見矣惜乎其嘉言善行不盡傳於世也其幸存而未泯者學者其可不盡心乎

○子曰道千乘之國敬事而信節用而愛人使民以時道乘皆去聲○道治也千乘諸侯之國其地可出兵車千乘者也敬者主一無適之謂敬事而信者敬其事而信於民也時謂農隙之時言治國之要在此五者亦務本之意也○程子曰此言至淺然當時諸侯果能此亦足以治其國矣聖人言雖至近上下皆通此三言者若擬其極堯舜之治亦不過此若常人之言近則淺近而已矣楊氏曰上不敬則下慢不信則下疑下慢而疑事不立矣敬事而信以身先之也易曰節以制度不傷財不害民蓋後用則傷財傷財必至於害民故愛民必先於節用然使之不以其時則力本者不獲自盡雖有愛人之心而人不被其澤矣然此特論其所存而已未及爲政也苟無是心則雖有政不行焉胡氏曰凡此數者又皆以敬爲主

愚謂五者反復相因各有次第讀者宜細推之○子曰弟子入則孝出則弟謹而信汎愛衆而親仁行有餘力則以學文

愚謂反反音扶

行去聲德行同

爲去聲

弟子之弟上聲則弟之弟去聲○謹者行之有常也信者言之有實也汎廣也衆謂衆人親近也仁謂仁者餘力猶言暇日以用也文謂詩書六藝之文○程子曰爲弟子之職力有餘則學文不脩其職而先文非爲己之學也尹氏曰德行本也文藝末也窮其本末知所先後可以入德矣洪氏曰未有餘力而學文則文滅其質有餘力而不學文則質勝而野愚謂力行而不學文則無以考聖賢之成法識事理之當然而所行或出於私意非但失之於野而已○子夏曰賢賢易色事父母能竭其力事君能致其身與朋友交言而有